



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	東京学芸大学地理学会60周年への想い：「学芸地理」の未来に向かって（東京学芸大学地理学会60周年にあたって）(fulltext)
Author(s)	上野,和彦
Citation	学芸地理(68): 1-2
Issue Date	2013-07-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/134218
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

東京学芸大学地理学会 60周年への想い —「学芸地理」の未来に向かって—

東京学芸大学地理学会 会長 上野 和彦*

1952年7月に発足した東京学芸大学地理学会も本年2012年で60年、人間でいえば還暦を迎えた。想えば30周年、50周年からあつという間であった。この間、地理学分野も大きく変化した。私の恩師にあたる第一世代の先生方すべてが逝去し、その後を継いだ第二世代の定年退職、そして私を含めた第三世代も近いうちにすべて現役の舞台から退場することになり、学芸大学地理学分野も新しい世代による「学芸地理」の構築に迫られている。

学芸大学の地理は、丹念なフィールドワークを基本とした実証的地理学によって支えられ、深い地理学的素養を身につけた小・中・高の教員養成を特徴としてきた。なかには私のように道を踏み外し、主に地理学を専門とする卒業生もいるが、これらもまた多くは小・中・高校の教育現場や教育行政に身をおいたこともあり、地理教育と密接にかかわってきた。そして、多くの卒業生が学部・大学院における臨地研究、卒業論文、修士論文における調査・研究を通して地理学と地理教育の確かな素養を身につけ、教育現場で活躍していることは学芸地理の誇りである。

さて、学芸地理学会を支えてきたのは、教員とその教え子たちの密接な関係ばかりでなく、卒業期を越えた上と下の深い交流であった。学芸地理学会における研究報告会、地理教育シンポジウム、巡検等は、卒業期が10年以上離れ

た卒業生と現役大学院・学部生が企画から実施まで担当し、会場も卒業生の勤務先学校で行うこともしばしばであった。その過程で地理教育シンポジウム等のテーマや内容に関して、卒業生間あるいは卒業生と現役学生との間で激論が交わされたことを鮮明に記憶している。こうした学芸地理学会を核とした研究・教育実践活動は、機関誌『学芸地理』に掲載され、教員・卒業生・現役学生の成果を公表する機会となってきた。ちなみに機関誌『学芸地理』は、東京学芸大学リポジトリに創刊以来の冊子がデジタル化されて掲載されている。東京学芸大学において卒業生を中心とした学会の機関誌が多々ある中で、創刊号から掲載されているのは『学芸地理』のみで、歴史の重みと蓄積の厚さを示している。

一方、地理学研究においても数多くの地理学者を輩出してきた。日本地理学会、経済地理学会等における初めての研究報告の時は、卒業生が駆けつけて激励し、その評価とねぎらいのために夕食を共にすることが一般的であった。学芸地理は、師弟あるいは先輩・後輩という人間関係が濃密であり、これを古いとみるか、煩わしいとみるかは世代の差があるが、少なくともわれわれの世代はこの関係が有効に働き、地理学と地理教育の水準を向上させ、学芸地理という組織を支えてきたと思う。

しかしながらこの10年の間に「学芸地理」

* 東京学芸大学・名誉教授

は、次第に変質しつつある。学芸地理に集まる卒業生の数も少なくなり、それも「いつもの顔ぶれ」となった。そして学芸地理の運営も現役の大学院生に全て任せっきりになる状態に陥っている。この学芸地理の変化は、東京学芸大学の1980年代後半から現在まで続く大学改革による組織改編の中で、教育系地理学教室と教養系教室にわかれてしまったことに1つの要因がある。それは私を含む教員の半分が教養系担当となり、学芸地理の基盤である教育系社会科の地理専攻・選修学生と疎遠となり、学芸地理の伝統的古き人間関係が薄れつつあった。しかし、そうであったとしても長い間地理学の教員および卒業生として深く学芸地理に関わってきたにも拘わらず、こうした状況を打開できず、卒業生・教員・院生・学生の力を結集できなかったことについては深く反省し、現役の教員・院生・学生、そしてこれまで学芸地理を支えてきた多くの卒業生にお詫びしなくてはならない。

学芸地理は60年を経て、老年期にある。それ故、われわれ旧世代が退き、古き人間関係か

ら解き放たれる今こそが「回春」の段階にある。学芸地理の『伝統』は輝かしいものがあり、その「歴史」は大切にしなければならない。しかし、伝統は『革新』の連続である。今こそ学芸地理は21世紀の世界に発信するための体制の大転換を図るべき時期に来ている。幸いにも学芸地理は地理学・地理教育をリードする優秀で熱意に燃えたスタッフと未来の学芸地理を担う意志をもつ若き卒業生・大学院生・学部生がいる。これらの間の新たな人間関係の構築が学芸地理をより高い次元に押し上げることになる。

グローバル化が進み、世界と地域の研究・教育は以前にも増して重要であることは言うまでもない。一方、地理教育の実践の場である学校は、子どもたちの「未来」を確かなものにする指導力をもつ教員を求めている。これらの要求に学芸地理がいかに対応していくか、学芸地理が担うべき課題は山積している。新たなリーダーのもとで、21世紀の地理学および地理教育に取り組む新生「学芸地理」に期待したい。